

「カリフォルニア物語」 作：吉田秋生(あきみ)

小学館文庫(1994.11発行) 全4巻 各583円(約350p)

紹介者：榎本博康

[紹介]

ヒースはカリフォルニア州サン・ディエゴに生まれた。厳格な大学教授で弁護士の父と、9歳年上でエリートの兄を持ち、母は彼が2歳の時に離婚していた。彼は高校で短距離から長距離の選手に転向したが、悪い仲間に見込まれて次第にドロップアウトしていく。たまたま出逢ったヒッピーの、通称インディアンを頼ってニューヨークに行く。その道中で知り合った、プエルトリコ系移民の子、男娼のイーヴとアパートを共にする。イーヴは読み書きができない。人権もないどん底の生活から、彼らの仲間になり人間になる。と同時に、ヒースもイーヴによって心を開いていく。

やがて2年経ち20歳になる。彼の兄が交通事故で突然死ぬ。残された兄の手紙に、自由に育った君がうらやましかったと書かれていた。

そしてイーヴの死があり、その犯人として疑われる。全ての疑惑が晴れて、またかつてのように暮らせると誰もが思った途端に、ヒースはそっと彼らのもとを去る。



[感想]

少女マンガだからと先入観はいけない。人間の幸せとは何かを、真っ向から問いかけている真摯な作品だ。当時の社会現象であったヒッピーを描きながらも、そこに普遍的な人間性が溢れている。

この作品を特徴づける単語を並べれば、ヒッピー、ドラッグ、セックス、ホモ、暴力などで、これだけで読むに値しないとのレッテルを貼られてしまいそうだが、この話はそのような言葉から連想される通俗小説ではない。何よりも登場人物の性格付けが的確であり、生き生きとしている。また場面設定やプロットが実にうまく、それらの持つ象徴としての意味を、ストーリー展開の中で、実に上手に使っている。

そしてマンガとして重要なことだが、絵が美しい。作者は女性であり、弱冠20歳の頃に描いたとは思えない、硬派の作品である。少女マンガには、卓越した作家が居ると聞いていたが、本当だった。

さてランニングだが、ヒースはニューヨークに着き、歓迎パーティーの翌朝、すぐに街を走る。新しい環境で新たな自己を形成しようとする、前向きな心を表している。

一方、彼がサン・ディエゴの家を出るシーンが回想される。家を出る彼がジョガーとすれ違う場面は、今までの自己からの決別である。

彼はニューヨークのハーフマラソンに出る。折り返しでトップだったが、そのまま直進してコースアウトしてしまう。彼にとって真っ直ぐに走ることが、コースをそれることになるという皮肉な人生に、彼は彼自身を嗤う。

この話はランニングが主題ではないのだが、ヒースの走る場面が多くある。是非読みとって欲しいのだが、走る場面毎にヒースにとっての走る意味が異なっているのだ。これほどまでに走る中で多様な表現をしている作品を私は知らない。かくもヒースにとって走ることは根源的な行為なのだ。走る中に、彼は彼の楽園を見ているのだ。深く反省する。私は日々走る度に、どれほどの心を込めているのだろうか。

この話の結末の後に、ヒースの誕生から高校までのことが回想されている。なぜ彼の兄がヒースを羨ましいと感じたか、家庭内の事情が語られて、ヒースの心がどこから来たのか、謎解きがされる。そして、高校の短距離走でヒースがトップでゴールに飛び込む瞬間の青春群像が描かれている。そこには彼の全ての良い物が凝縮されている。この絵は美しく、マンガという技法の神髄である。この雄弁な絵には、一切の説明が不要である。

(1997. 7. 15)

#### [リバイバル感想]

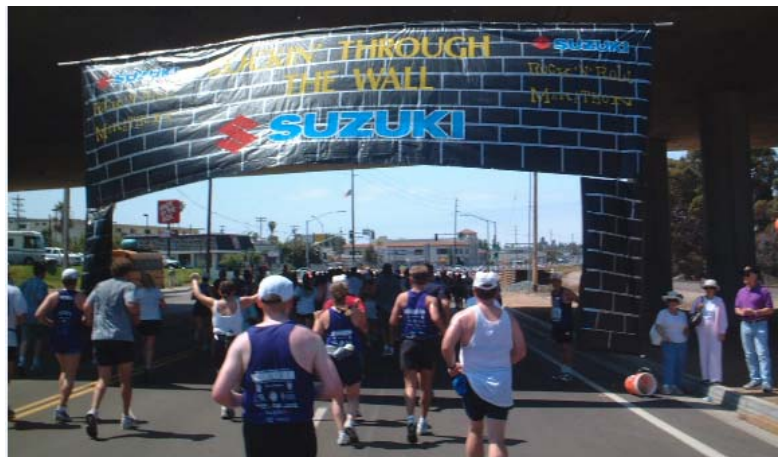
現在は小学館eコミック全8巻(各巻420円+税)で読めるようだ。便利な世の中になったものだ。そして2008年にはミュージカル仕立ての舞台になっていたようだ。見たかった、残念。

さて「紹介」欄で結末まで書いてしまった。ネタバレに怒る人がいるかもしれない。でもこれは作品世界に浸るものであり、筋を追うものではない。この作品を読んでいると、本当に心が優しくなり、未熟な若いころの思い出が重なり、切ないという言葉がふさわしいと思わせる。結末を知っていながら、何度でも読み返すことができる。心が帰る場所が、ここにある、という気持ちに包まれる。

さて、サン・ディエゴは2002年のロックンロールマラソンで訪問した。現地のホテルでDon McNelly氏と再会し、翌朝、彼の運転で会場に向かった。整然と運営されている、立派な大会だった。常に陽光がまぶしい。

そして帰りに愕然とした。朝、会場には早めに着いたので、他に車は少なかった。しかし帰りには見渡す限りの車、車…であり、レンタカーなのでほとんど自分の車に

見覚えがない。探すのに30分以上かかった。他にもそのような人たちが居たことが救いだったが。



サン・ディエゴ ロックンロールマラソンの20マイルの壁

(2002年)

(2020. 6. 03)